アメリカの絵本作家 William Steig 研究
―生涯とその描写法を探る―

藤　本　朝　巳

はじめに ― 病との闘いと漫画の描写法

芸術家の仕事には、その表現内容が小説、絵画、音楽、舞踏･･･と、それが何であろうと、その活動を始めるようになった何らかのきっかけがある。そして、その動機が明確で意識的なものであろうと、あるいは無意識なものであろうと、何かを始めるには個人的な理由があるはずである。また、芸術家はその表現内容を巧く伝達する手法や技術を、何らかの修練を積んで身に付けているはずである。そうであるなら、一人の芸術家の生い立ち、教育、思想、経験、出会いなど、その芸術家の個人史を調査することは、作品解釈に大いに役に立つ。そうした調査をせずに、作品を直接真正面から批評することはもちろん可能であろうが、芸術家の個人的背景を知れば、作品そのものを作品のみで解釈するより、さらに深く理解できるに違いない。

アメリカの絵本作家 William Steig（ウィリアム･スタイグ､1907 － 2003）[1] は、絵本作家として特異な作品を残した画家であるが、彼が児童文学の分野の仕事を始めたのは六〇歳を過ぎてからであった。それまでは雑誌 *The New Yorker* などに風刺漫画を描いて生計を立てていた。商業美術の分野でイラストレータとして活躍していた画家が、なにゆえ、子どもにも大人にも愛される絵本を描くようになったのだろうか。そして、その描写手法を身に付けた背景には何があったのだろうか。その理由を明らかにすることが、そしてその理由をもとに作品の特徴を論じることが、この論考の目的である。そこで、この論文では、絵本作家ウィリアム・スタイグ（以降スタイグと表記する）の生涯と絵本作家

としての描写法を検証して、上記の理由を明らかにしてみたい。

さて、彼の生涯と作品を知るに重要なことは以下の二点であると思われる。一点は彼が生涯、ある病を抱えて、闘病していたこと、そして精神科医ヴィルヘルム・ライヒ（Wilhelm Reich, 1897 - 1957）に出会い、彼の治療を受け、ライヒの精神、思想に励まされて創造芸術の道を歩んだことである。もう一点は、スタイグが幼い頃の、彼の家庭の状況に関係することであるが、一家が貧しかったこと、しかしその中で、弟思いの兄から〈笑顔〉と〈しかめ面〉などの描き方を教わり、感情表現を巧みに描けるようになったことである。こうして、スタイグは風刺画家として生き、また児童文学の作家としての地位を築いていったと思われる。上記の二点をもとに、この論考では彼の生涯と作品の関係、また作品のテーマを表現する描写法について記したい。

スタイグの前半生における特質すべき事実

スタイグの経歴を見ると、彼は四人兄弟の三番目として、ニューヨークのブルックリンに生まれ、ブロンクスで育っていることがわかる。両親はともに美術を愛し、社会主義を信奉する人たちであった。彼らは子どもたちに美を愛し、正直に働くことの大切さを教えたという。

教育歴を見ると、スタイグは学生時代、学業成績は特に秀でていなかったが、画才には恵まれていた。彼が高校新聞に風刺画を描き、数年後、芸術家になることを願った時、両親は心から喜んでくれたという。その後、若くして働くことになるが、彼がなにゆえ若くして働き始めたのか、また、なぜ広告の仕事をするようになったのか、そしてその仕事をどう思っていたのか、を示す言及を、スタイグについて詳細に聴き取り調査をし、克明に記したジョナサン・コットの著書[2]から引用する。

> William Steig is a direct, relaxed, communicative human being, but he has little time or inclination for garrulous theorizing, small talk, or fustian chatter. During his two years at City College（which he entered

at sixteen), he spent most of his time on the swimming and water polo teams. Later, at the National Academy of Design, he especially remembers playing football in the backyard. "I wasn't interested in any form of culture at that time," Steig recalls. "In fact, I started out with the idea of going to sea — I wanted to go around and see the world. But I couldn't, because my father lost all his savings in the Wall Street crash. My two older brothers were married, and I had to take care of the family. But I vaguely had the idea of becoming a writer, when I thought of doing anything. I love the physical act of writing, by the way. I used to keep a journal — not because I had anything to say but because I liked moving the pen. I always wondered what this signified. But, anyway, I found it pleasurable.

So in order to support my family, I started doing cartoons. In my family it was understood that the only thing to do was to be an artist. Henry talked of being a dentist, and everyone just laughed. My old man thought that going into business was vulgar, and so we were sort of driven into the arts. Later, I did a lot of advertising, which I always felt bad about — I felt that I was never really being true to myself." (Cott, p.113)

上記の通り、スタイグは若い時から懸命に働いた。(世界大恐慌時) 父親が破産し、兄たちはすでに結婚して家を離れており、弟はまだ子どもだったので、二三歳の彼が家族を支えなければならなかったからである。まもなく彼は漫画家が掲載されることを願う『ニューヨーカー』に風刺漫画を描くようになった。こうしてスタイグは風刺画、広告誌などの挿絵などの作品で活躍し、有名になったのである。

しかしながら、彼は広告業界の仕事は好きになれなかったと記している。というのも、広告の仕事での収入は良かったのだが、彼はものを売るために芸術を利用することを好ましいこととは思わなかったという。彼は「芸術とは喜び

を与えるべきもの」と思っていたからである。

その後、ある時、作家のロバート・クラウス（Robert Kraus, 1925 –2001、アメリカの児童文学作家、漫画家、出版業者）が彼に「子どものための本」を描くことを勧めると、スタイグもちょうど広告業界からは逃げ出したいと思っており、新しいことに挑戦したいと思っていたという。こうして、商業界での仕事から児童文学の仕事に転向したのであった。

ヴィルヘルム・ライヒに対する評価

ところで、病に悩まされていたスタイグが精神科医ライヒに出会ったのは四〇歳になろうという時であった。スタイグはうつ病という診断を受け、ライヒはユーモアを交えて彼に治療を施したという。ライヒはスタイグが落ち込むと上手に笑わせて励ました。病をかかえながら、スタイグは心の閉ざされた人のさまざま様子をたえず直視し、それが突然現れる瞬間やその場面を風刺的に描いたという。そうした苦悩や心の解放は、彼の漫画作品の随所に見ることができる。

スタイグは、ライヒのことをインタビューの際、以下のように記している。[3] 聞き手は児童文学研究者Leonard S. Marcus（LSM）である。

LSM：You said somewhere that you consider Reich one of the most important people of our time.

WS ：I think he was the most important person of this century.

LSM：What was the essence of his greatness?

WS ：He demonstrated that space is not empty but filled with what he called orgone energy[4]. He discovered, for example, that a stone, though not alive, is full of energy, which is alive. That when you die, your matter dies but not your energy. That people's great problem is that their energy is bound up in what he called muscular armature; in other words, that most people are standing

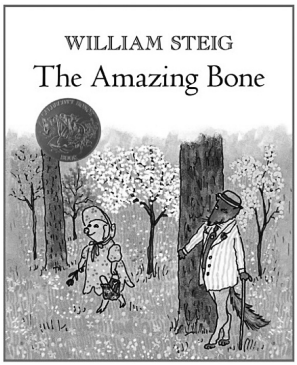
on their own balls most of the time.

LSM：Did you think of some of your early drawings as depictions of people who were “armored” in the Reichian sense?

WS ：Yeah, that’s true ― of *The Lonely Ones*, for example. When I met Reich, he had that book on his table. He liked it. Then later I illustrated a book of his. He was a remarkable man.（pp. 194-195）

上記の文章は、スタイグがライヒをいかに高く評価していたか、またライヒの orgone energy という概念、そしてライヒが人格の鎧と呼んだ「凍り付いたエネルギー」という概念をよく表しており、さらに、それらの概念とスタイグの病いの時の治療の様子、さらに後に示すように、彼の絵本に登場する主人公の変身願望をうまく言い表していると言える。

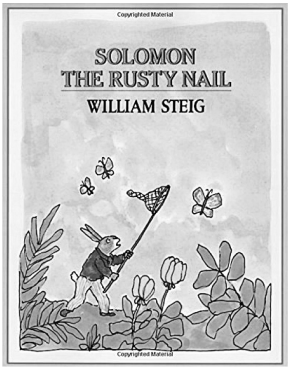
代表作の特徴と背景



以上の事実をもとに、スタイグの作品を具体的に読み解いてみたい。初期の *The Amazing Bone*（一九七六年出版、一九七七年、コールデコット・オーナー賞受賞）では、コブタの娘パールが学校からの帰り道、森の中で一本の骨を拾う。それはものをいう骨で、どんな音でも真似のできる不思議な骨であった。なぜなら元の持ち主が魔女だったからである。パールは道々、骨とおしゃべりをしながら歩いて行くが、突然、ピストルと短剣を持った三人の追剥たちに襲われてしまう。しかし、骨がライオンの吼える声などを立て、追剥たちを追い散らしてしまう。続いてパールは狐に捕まり、狐の家に連れ去られてしまう。パールは部屋に閉じ込められ、狐は晩ごはんの準備に取りかかる。今にも調理されそうになった時、骨が不思議なことに呪文を唱えて、狐をネズミくらいに小さ

くしてしまう。助かったパールは「あなたにまほうがつかえるなんて、しらなかったわ」とびっくりしてしまう。帰宅したパールは骨を両親に見せ、一日のことを話す。その後、パールは骨を大事にして過ごすということで物語は閉じられる。[5]

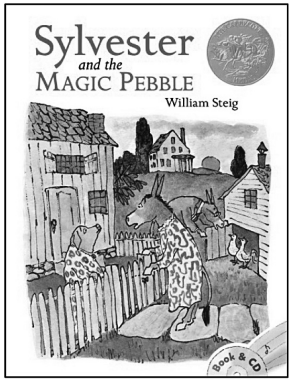
イラストは物語の緊迫感とはうらはらに、春のさわやかな草花の色で彩られ、絵本全体が、パールの服のピンク色を基調として美しく着色してある。緊張を醸し出すために、場面ごとに文章とイラストを上下に入れ替え、巧みに配置して読ませる手法は漫画で培った表現法であろう。また、他人に捕らわれて自分がどうなるかわからない、という恐怖感は、病を抱えていたスタイグの日々の思いであったに違いないし、事態を変えることのできる魔法の骨は、病に苦しみ、何とか病気を克服したいというスタイグの切なる思いを感じさせる。



Solomon: The Rusty Nail（一九八五年）は、子ウサギ、ソロモンの物語である。ある日、ソロモンは鼻をこすっていると、突然、体がかたくなり、くぎに変身してしまう。「ぼくは　くぎじゃない。ウサギだ！」と叫ぶと元の姿に戻る。ソロモンは練習しているうちに、自由自在にくぎになったり、ウサギになったりできるようになる。こうして、ソロモンはみなを煙に巻いて得意になっていた。しかし、夏休みのある日、彼は変身するところを片目のネコに見つかってしまい、くぎのまま連れ去られてしまう。ネコの夫婦は彼をくぎのままオリに入れて、元の姿に戻ったら食べてやろうと待つ。ネコは、くぎが元のウサギに戻らないので、くぎを家の外の羽目板に打ち付けてしまう。ところがある日、ネコの不注意で火事になり、その場面は以下のように語られている。「ソロモンは･･･からだが･･･あつくなり･･･自分が太陽になったような　きもちでした」。その後、家が崩れ落ち、「ソロモンは　すこしずつ　さめていきました。いいきもちでした。」こうしてソロモンはウサギに戻り、家族の待つ家に戻ることができる。この物語も変身願望があり、健常な時と病気の時のスタイグの気持が表現され、スタイグの本心が描かれているといえよう。この作品も内容

の深刻さにもかかわらず、イラストは全体的に水彩の、さわやかな色調で描いてある。また、表情に大変ユーモアがあり、見る者が思わず微笑むように描写してある。その理由は、彼のペン描写法にあるように思われる。そこで続いて、コールデコット受賞作である『ロバのシルベスターとまはうのこいし』を用いて、彼の〈笑顔〉と〈しかめ面〉の描き方について記したい。

点の表情 ―〈笑顔〉と〈しかめ面〉



ロバの少年[6] シルベスター・ダンカンの楽しみは小石集めだった。夏休み、ダンカンは河原で奇妙な赤い小石を見つけ、その石に触れて願いを唱えると、願いが叶うことを知る。喜び勇んで帰宅の途中、彼はライオンに出合い、慌てて「ぼくは岩になりたい」と言ってしまい、岩になる。ライオンは去ってしまったものの、小石は地面に転がって触ることもできず、ダンカンは岩のまま過ごすことになる。一方、自宅では両親が行方不明のダンカンのことを心配している。仲間と探し回って、警察にも届けるが見つからない。月日は流れ、ダンカンはそのまま眠って過ごし、秋、冬が過ぎ、春になる。五月に両親がピクニックにやって来て、二人は小石を見つけ、岩のままのダンカンの上に置き、息子を懐かしむ。その時、息子は「ああ、もとのぼくになりたい。」と願い、もとの姿に戻ることができる。こうして親子三人で喜び会い、帰宅して終わる。この作品も本当の自分（健康で安心）と困った時（病気で不安）の自分の状態を象徴的に描いた作品と言えよう。

さて、風刺漫画は見る者に瞬時にして、描かれている事物のその何たるかを伝える必要がある。E・H・ゴンブリッチは「読者はちょっとの間これに目をとどめて、意味を理解し、「うまいな、この通りだよ」、そうつぶやいて書評とかスポーツ欄･･･に目を移す」[7] と記している。読者は絵を見て、その表情を瞬間

的に読み取る。そして人の表情を一番上手に伝えるのは、目の描き方であろう。

漫画は表情を伝えるためにさまざまな手法を用いるが、なかでも目がもっとも表情を伝える有効なコードといえよう。『漫画原論』の著者、四方田犬彦は、「眼は悦び、恐怖、悲嘆、当惑、驚愕といった表情を実に餞舌に表象している」[8] と述べている。その眼を表すものが基本的には点であることを念頭におき、この絵本の眼の描き方を見ていきたい。

『ロバのシルベスター』の眼の表情に注目したい。例えば、ダンカンが魔法の小石を見つける場面（当惑）。小石に魔法があることを知り、小石を持って喜び勇んで帰る場面（悦び／有頂天）、ライオンに出合ってしまう場面（図―1 恐怖）、心配した両親が彼を捜し回る場面（心配）。捜し回っても息子が見つからず、父親が悲嘆にくれる場面（図―2 悲嘆）。季節はめぐり、魔法が解けて、ダンカンがもとの姿に戻る場面（図―3 喜び）など。これらの様態は、目の表情で適格に描いてある。

図―1　恐怖

図―2　悲嘆

図―3　喜び

ところで、プロの画家であっても、動物を、あたかも人間であるかのように擬人化して描くことは難しいことである。しかし、スタイグは若い時分から、漫画で擬人化の工夫を重ねていた。この絵本でも、ダンカンと彼の両親を終始立って歩く姿で、すなわち擬人化して描いた。また、彼はダンカンを大人のロバや人間のようにではなく、子どもに見えるように描いたという。このような描写も、スタイグの漫画家として長く培った経験、技量によって可能になった描写であった。

ところで、スタイグの絵本の多くに、燦々と輝く太陽が描かれている。その

ことについて、ジョナサン・コットは彼の著書で以下のように述べている。

> Steig's children's books are all filled with shining suns. And it was Picasso who said: "Any man can make the sun into a yellow ball. Ah, but to make a yellow ball into a sun!" Jeanne Steig says: "Bill talks about Picasso, and Reich, and his father in the present tense ― they *love*, they *do*, they *say*: they're really important people to him and they're really with him."
>
> William Steig is with us, too（his most recent picture book, *Doctor De Soto*, published in 1982, shows a mouse-dentist high- spiritedly outfoxing a foxy patient）, reminding us ― as he writes in his "Notes" ― that "painters do not help us shed our tears, but demand of us joy in creation.... The active, ardent spectator re-creates the painting, following the paths of energy laid down by the artist. He experiences again what the artist experienced in making the painting: movement, emotion, a glorying in man's boundless creative power, and wonder ― which is respect for life."（Cott, p. 133）

make a yellow ball into a sun!(黄色い丸い形を太陽にする！)という表現は、ピカソやライヒを敬愛したスタイグのスタイグらしい思いを表した文章であろう。スタイグが、創造する喜びをなんとかして引き出そうとする、その衝動を持ち続けられたのは、病を抱えながら、苦悶しながらも、それでも生きることを前向きに考える気持を常に心にもっていたからであろう。エネルギーに満ち、生を謳歌するような作品を作り続けたピカソや精神科医のライヒの思想、生き方、そしてその仕事を身近に感じ、スタイグは彼らの生き方に自分の思いと通ずるものを感じていたに違いない。

まとめ ― 失われた愛娘を想って

最後に、もう一点、特記すべき事実を記しておきたい。スタイグは作品『ロバのシルベスターとまはうのこいし』を特別の思いを込めて描いたという。この作品の制作当時、彼は妻と離婚して、愛娘マギーも母親と一緒に出て行ってしまっていたと言う。その別離の寂しさの中、彼は当時の自身の思いを、ダンカンの両親が子どもを失った姿に重ねて描いたのであろうと思われる。その寂しさ、頼りなさのような趣きが、作品に滲みでているように思われる。スタイグはこの作品を一九六八年、六一歳の時に完成している。

スタイグは生涯、病との闘いから自分を変えたいという願望を持っていた。そのことは、彼の作品のテーマと密接につながっていたといえよう。漫画家から絵本作家に転身したスタイグは、鎧に閉ざされた人（病を抱えた人）のさまざまな思いをたえず直視し、その症状が突然現れる刹那や、症状が元に戻る状態を、彼の作品の登場者の表情に重ねて巧みに、ユーモアを交えて描いてきた。

また、幼い頃から、〈笑顔〉と〈しかめ面〉の描写を出発点にして、すなわち、目の表情を適格に表現し、また口の端を上げて、にこやかな表情を描いたり、さらには口をへの字に曲げることで怒った表情を描くなど、漫画家として身に付けた表現を用いて、子どもの本の作家としての地位を築いたのであった。言葉を変えていえば、スタイグは登場者が各場面で味わう、その感情に入り込み、それを適格に伝えるすべを心得ていたと言える。そのことが、彼の作品が長く世界中の人々に親しまれている理由であるに違いない。

参考・引用文献

・Cott, Jonathan. *Pipers at the Gates of Dawn : The Wisdom of Children's Literature*. New York: McGraw-Hill, 1985.

・Marcus, Leonard S. *A Caldecott Celebration : Seven Artists and Their Paths to the Caldecott Medal*. New York: Walker & Co, 2008, P.26-30.

・Marcus, Leonard S. *Ways of Telling: Conversations on the Art of the Picture Book*. New York: Dutton Children's Books, 2002.

・Steig, William. *Solomon : the Rusty Nail*. New York: Farrar, Straus, Giroux, 1985.
邦訳『くぎになったソロモン』小川悦子訳、セーラー出版、一九八九年

・Steig, William. *Sylvester and the Magic Pebble*. New York: Windmill Books Simon & Schuster, Inc, 1969.
邦訳『ロバのシルベスターとまはうのこいし』瀬田貞二訳、評論社、一九七五年
・Steig, William. *The amazing bone*. New York, NY: Square Fish Farrar, Straus and Giroux,1976.
邦訳『ものいうほね』瀬田貞二訳、評論社、一九七八年

注

1　ウィリアム・スタイグ（William Steig, 一九〇七－二〇〇三）ニューヨーク市生まれ。ニューヨーク市立大学などで学んだ。一九三〇年から風刺漫画家として活躍。代表作は*About People: A book of symbolical drawings*, 1939。子ども向け作品としては言葉遊び本CDB！（一九六八）でデビュー。翌年、『ロバのシルベスターとまはうのこいし』でコールデコット賞受賞。七六年『アベルの島』、八二年『ねずみのチュー先生』はニューベリー賞次点作に選出された。『みにくいシュレック』(Shrek!、1990) はCGアニメーション映画『シュレック』の原作である。

2　Cott, Jonathan. *Pipers at the Gates of Dawn : The Wisdom of Children's Literature*. New York: McGraw-Hill, 1985. P.85-133

3　この文章は、スタイグが90歳近くになっていた時、アメリカの児童文学研究者Leonard S. Marcus のインタビューに答えた際に述べられたものである。

4　orgone energy　オルゴン・エネルギー　ウィリアム・ライヒの説で、宇宙に充満している非物質的な生命力のこと。

5　無防備なパールと小粋な狐は、イギリスの絵本作家ビアトリクス・ポターの絵本『あひるのジマイマ』を彷彿とさせる。また物語そのものも『ジマイマ』を思い出させる。

6　幼いころ、スタイグの大好きな子どもの本は『ピノッキオ』だったという。これは、いつか生きた男の子になることをずっと願った人形の物語であった。ピノッキオがいたずらの罰としてロバにされるという展開は『ロバのシルベスターとまはうのこいし』の一つのヒントになっていると思われる。

7　『棒馬考―イメージの読解』、E・H・ゴンブリッチ、二見史郎他訳、勁草書房、一九九四年、二七四ページ

8　『漫画原論』、四方田犬彦、筑摩書房、一九九四年、一二六ページ。